P1-060

ひらめきときめきサイエンス　＜体感しよう！小さく生まれた子どもの命を救う、癒す、育てるケアの力-2017＞からの学び

井上 みゆき[1]、根本 篤[2]、一ノ瀬 彩加[2]、小林 幸実[2]

[1]山梨県立大学看護学部
[2]山梨県立中央病院

【はじめに】
ひらめきときめきサイエンスとは、科研費で実施した研究成果を、小、中、高校生にわかりやすく伝える事を目的としている。
本事業は高校生がNICUでのケアを知ることで小さな生命に対する倫理観を育むみ、新生児医療に魅力を感じ、将来新生児医療に携わる者がいることを目標として、＜体感しよう！小さく生まれた子どもの命を救う、癒す、育てるケアの力＞を継続して実施している。本研究の目的は、2017年度の本事業での高校生の学びを明らかにすることである。
【方法】
事業内容は、＜科研の説明＞ ＜新生児医療の説明＞ ＜NICUの見学＞　＜小さな赤ちゃんを育てた母親の体験＞で構成した。対象者は高校生23名で、事業終了後に質問紙調査を実施した。本事業からの学びについて、テキストマイニング法でクラスター分析をした。解析には、WordMinerを用いた。実施大学の倫理審査委員会の承認を得た。
【結果】
対象者は、高校23名であった。22名がプログラムはとてもおもしろく、わかりやすいと回答した。
学びは5つのクラスターに分類され、各クラスターを構成している言葉から得られた特徴は、クラスター1は家族、説明、ハンディー、幸せ、人生から＜ハンディーがあってもその子なりの幸せや人生があることを知った＞であった。クラスター2は、初めて、体験、貴重、NICU、役に立つ、将来の職業から＜初めてNICUに入った貴重な経験は将来の職業選択に役に立つ＞であった。クラスター3は、小さな、見る、体、必死、頑張から＜小さな子が一生懸命生きる姿を見て、自分も必死に頑張ろうと思った＞であった。クラスター4は、医療、興味、多くの人、お父さん、お母さん、やりがい、意味、かなえる、頑張る、癒される＜医療者だけでなく、お母さんやお父さんもチームとなり医療をしていくことに意味を感じた＞であった。クラスター5は、知る、命、新生児、技術、重み、医療、育つ、一つ、救うから＜新生児医療技術の進歩により一つの命が育つ素晴らしさを知った＞であった。
【考察】
クラスター2、4、5、から、NICUでのケアを学び、チーム医療により育つ命のことを知り、職業の選択肢が広がったと考えられた。クラスター1、3からは、赤ちゃんが一生懸命に生きる姿から、人生の幸せや頑張りについて学んだと考えられた。

P1-061

NICU／GCU入院患児のきょうだいへの支援に関する看護者の認識

佐々木 くみ子[1]、蓮佛 瞳[2]、岩田 万季[3]

[1]鳥取大学医学部 保健学科
[2]鳥取県立中央病院
[3]国立成育医療研究センター

【目的】
NICUに勤務する看護師が経験したNICU/GCUに入院している患児とそのきょうだいとの面会に関連した出来事やNICU/GCUにおけるきょうだい面会に対する考え、患児のきょうだいへの関わりについて明らかにした。
【方法】
周産期母子医療センター9施設236名の看護職を対象に無記名自記式調査を実施した。データは記述的統計を用いて分析した。
【結果】
回収は195部（回収率89.4%）、うち191部（97.9%）を分析対象とした。対象者の看護職勤務年数は平均12.1±8.8年、NICU/GCU・小児関連病棟での勤務年数は平均7.0±6.3年であった。きょうだい面会について看護職の56.5%が家族から相談された経験を持ち、88.5%が面会を希望された経験があった。看護職の90.6%がきょうだい面会の必要性を認識していたが、原則全例に面会を実施していると回答したものは19.3%であった。きょうだい面会実施上の課題は感染対策の難しさ70.2%、面会日のきょうだいの健康状態評価の難しさ42.9%、きょうだいに対応するスタッフ人員調整の難しさ29.8%などであった。きょうだいへの支援については96.3%の看護職が何らかの支援を行っており、きょうだいに関する基本情報の収集93.2%、きょうだいの様子の情報収集85.3%、患児に対するきょうだいの受け止めの情報収集59.2%など、情報収集という間接的支援を多く実践していた。きょうだいの頑張りを褒める18.8%、患児のことについて一緒に話す15.7%、患児の様子を説明する14.7%などの直接的支援も行っていた。
【考察】
きょうだい面会に対する家族からの相談や面会希望に接する経験を持つものが多数を占め、看護職の多くがきょうだい面会の必要性を認識していた。それにも関わらず面会実施率が低い理由には感染管理の難しさが推察された。感染管理を困難にする背景には患児のきょうだいが幼いことが多く、そのために面会時のきょうだいの健康状態評価の難しさ、面会中のきょうだいへの支援の難しさが考えられた。きょうだい面会に対する医療者間の価値観の違いの影響も示唆された。また、看護職はきょうだいに対する何らかの直接的・間接的支援を行っており、きょうだいをケアの対象と捉え支援を提供していることが明らかとなった。

Presented by Medical*Online